

ドイツ語音韻把握の基礎 (3)

宮永 義夫

本稿は任意の綴りをドイツ語として発音する為に、学習者はどのような法則を、どの程度まで承知していればよいかを探る試みの第3部である。ここでは、第2部で浮かび上がった、音節、母音、子音、アクセントなどの確定によって、どのように実際の発音へ導かれて行くか、そのプロセスを示す。

キーワード： 個別性と普遍性、音節、母音、二重子音字、アクセント

1 個別性と普遍性

先行する『ドイツ語音韻把握の基礎(2)』¹⁾において、日本人の姓名をなるべくドイツ語風の綴りで表記するといった、いささか倒錯した手法を用いて、ドイツ語の綴りと発音の有様を言わば外側から規定することを試みた。本稿では、(2)において浮かび上がった問題点をドイツ語の構造そのものとして把握することを目指す。本論考全体を通じて明らかにしようとしていることは、言語論理学習を学習プログラムないし授業コンテンツとして確立しようとする時に、その音韻分野における前提の基礎事実をいかに把握するかである。言わば、学習プロセスのモデルの提示であって、事実を明らかにしようとしているのではない。事実が所与のものとして学習者に伝達されれば、それは言語事実学習が為されたのである。ここに提示しているモデルが教授法上の彫琢を受け、言語論理学習に定着することが重要である。

繰り返し述べているように、論理学習と事実学習は言語学習の両輪であり、特に事実学習無しには言語学習は成立せず、また、事実学習を完璧に積み重ねれば、自ずからその言語の論理が明白になる。更に、ある言語の論理とは、その言語の(抽象的な)事実には他ならない。結局の所、論理学習は事実学習に包摂されてしまう。つまり、論理学習は言語学習の1ステップに踏み止まり、そのステップを重要視することを意味する。これは1つの理念であり、筆者の立場はその理念によるものである。事実学習はトレーニングに収斂するものであるが、その手法は開発が進んでいるのに対して、論理学習の手法は未開発であることが筆者をこの方向に向かわせる1つの理由であるが、この理念に与するのは、現今の言語学習の状況にある。このことを異なる視点を加えて今一度、確認しておきたい。

日本におけるドイツ語学習(教育)は、否応なく、多文化主義に根を持つ多言語主義に依っている。英語に見られるような、共通語を標榜し、道具に徹するという立場は含み得ない。ドイツ語学習はドイツ語圏の文化と必然的に結び付いている。付言すれば、現今の我が国においては、英語以外の言語の学習はことごとく、多言語主義の立場に立たざるを得ないと思われる。ある個別言語

への学習を誘うものは、その言語が支える個別の文化・社会への関心であり、その言語を使用する人々へアプローチする為である。これは異文化理解に他ならず、ここでは彼我の差異の認識と克服が目標である。即ち、個別性が問題となる。それに対し、共通語は特定の人々を対象にしていないのであるから、その意味では普遍性に依拠している。共通語が英語である場合は、たとえ英語の多様性を認めるとしても、その様々な英語文化に生きる人々が存在する以上、多言語主義における個別言語への接近の1ケースなのである。

個別言語習得の究極の目標は、言語事実の完璧な把握、即ち母語化である。しかし今日、より一般的に外国語学習に求められているのは、他者との批判的交流の手段の獲得であって、母語化は、その意味では極めて特殊な個別的(つまり、個人が好きで目指す)目標である。より一般的、普遍的には、論理学習が重要である。個別言語習得である限りは、事実学習を積み重ねる他はなく、方向としては母語化を目指している。この中に個別でない(一般的な)言語習得が含まれている。その部分を担うのが論理学習であると言ってよい。論理学習は、個別言語に潜む言語としての特質へ眼差しを向けることである。ここでは個別性よりも普遍性が前面に出る。言語学習については、「知識」から「技術」へとという流れが強いと思われるが、その技術を普遍化するの知識である。もっと言語知識に目を向けてもよい。個別言語においては、その言語の規則や法則性を知ることが「知識」と言われるであろうが、その法則性を見いだす「技術」を磨くことが論理学習である。「言語センス」とも言い替えられる。これを磨く論理学習にもやはりトレーニングの要素があるが、その手法については未だ試行錯誤である。本論では、そのトレーニングの更に前提となる知識を見極めて、トレーニングの1つのモデルを試みている。

共通語主義は普遍性から出発する。しかし、他者は多様性の中にある。即ち個別的な存在である。英語は「事実上の世界標準」に近いかも知れないが、真の共通語ではあり得ないことは、繰り返し述べた通りである。何らかの仕方で共通語が実現したとしても、それは文化の基盤を持たず、あらゆる人にとって外国語である。そうすると、普遍的な内容から遠ざかり、個別的な文化に根ざす事柄に触れるようになると、差異が露呈して来る。こ

れを(1)では同床異夢と表現した²⁾。この差異から出発するのが、多言語主義である。質は異なるかも知れないが、一方の母語を他方は外国語として学習することになり、困難を強いる点については変わらないことを(2)で補足した³⁾。それでも、多言語主義をとる筆者としては、双方にとって外国語である共通語を採用するよりも、一方にとって外国語である方がまだましであると考え。そもそも言語学習は文化理解を必然的に伴う、またそうあるべきものである。共通語学習では異文化理解にならない。コミュニケーションの現場にあっては、学習した外国語において言語事実の蓄積が十分ということは、ほぼあり得ないとしても、共通語の場合は、言語事実は未確定に等しいからである。また、母語使用者相互にあって、差異から出発する方が他者理解としては正しい心構えではなからうか。

コミュニケーションが成立したということは、共通認識が形成されたことである。これは普遍性に基盤を持つ。言語使用は個別性(差異, 特殊性)から普遍性に至るのである。この時に働くのは言語論理である。ある言語の法則性, 規則は個別的なものの中に留まっているのであろうが、合意の形成には、それを越えた論理が働く。これは個別言語を超えた普遍的な言語の論理であり、個別文化を超えた人としての普遍性というべきものであろう。はなはだ心許ないが、コミュニケーションはこのようなものに依拠する他はないのである。また、このことは、個別言語の学習を通じてのみ実現されるのである。

2 音節・分綴

ドイツ語の音韻把握分野における論理学習のテーマモデルとして、書かれた文字から発音を推定することを取り上げている。文字・綴りを読む(発音する)ことは、言語学習の基本中の基本であり、この能力を身に付けることは当然要求される。事実学習ならば、聴覚イメージの定着、そのイメージを再現し発音する能力の獲得、文字・綴りの認識、綴りと聴覚イメージの結合、綴りの認識から発音の運動に至るまでの滑らかな連続性の獲得といったことがトレーニングされる。綴りの事実、発音の事実がまずあって、それがうまく結合されれば、綴りを読むという事実が形成される。綴りと発音の間には何らかの法則性がある、学習が個別的な状態を超えれば、その法則も1つの事実として現れてくる。法則性は知っているにこしたことはないが、これは知識であるから、運動能力に類似する言語運用能力にとっては二次的なものに留まる。トレーニングとしての論理学習は、まさに、この法則をいかに効率的に発見するかということ扱っている。事実学習は既に学んだこと的应用である。従って、実戦の前にいかに多くの事実を積み上げておくかということが重要である。これに対し論理学習は、外国語学習においては、予め事実を十分に積み上げておくことは事実上不可能であって、現場で事実を推定、確定したり、取り決めたりすることが常態であるとの認識から出発する。得られた事実の知識をいかに応用するかのレベルではなく、いかに事実を知るかのレベルである。多

様な異文化を理解するには、この段階をおろそかにしてはならない。

さて、綴りと発音の法則は、英語の場合、かなり複雑であり、言語学習の意義からすれば、この追求は大いに推奨されて然るべきものではあるが、学習プログラム上は、事実学習の積み重ねによる応用への要求が強く、この段階に踏み止まることには困難がある。それに比べて、ドイツ語は、法則が比較的平易であり、また、上のような要求も強くないことから、この法則の発見を学習プログラムに繰り込むことが容易である。法則の容易さを象徴する表現としてかねてより多用されて来たのが、「ローマ字読み」である。

ドイツ語は日本語ではないのであるから、音声学的には勿論ローマ字のようにドイツ語の綴りを読んではならない。しかし、日本語との類似性が「ローマ字的」との印象を生じさせることは間違いない。この類似性は何かを探ることが、ここでは論理学習である。一つ一つの音はドイツ語という個別言語内の事実として習得する他はないが、実は、日本人に発音できないような、日本語からかけ離れた発音は希である。日本語の標準的な音素ではない[c]も、異音としてはアサヒの「ヒ」が無声化した時などに見られ、少し日本語を顧みるだけでも感得できる。子音の発音は基本的にアルファベット名に使用される発音からの逸脱が少なく、音声学上の多少のズレはあっても、ほぼローマ字での発音のイメージ内に留まるものも多い。

更にローマ字的発音の印象に大きく貢献するのが母音である。長短の区別は問題になるが、母音数が少ない。長短を区別しなければ、変母音を含めて14しかない。長音になるのは8つで、音質としては全て短音に含まれるものである。開母音/閉母音の差を考えなければ、変母音以外は全くローマ字と同じである。高頻度の二重母音が3つに限られることも影響しているであろう。二重母音は、書記体系から見て、2つの母音字の隣接の一部を成しているが、発音上は滑らかに変化する音の連続である。2つの母音字は二重母音の開始点と終着点ないし目標点を表示していると言える。この開始点、実質的終着点、目標点に限れば、上の14種の中にある。

しかし、より本質的にローマ字読みを支えていると思われるのは、音節の果たす役割である。黙字の母音字が少ない為もあろうが、基本的に音節毎に切って認識することが出来る。英語のnameは1音節であるから、そのものを全体として把握しなければならないが、ドイツ語のNameは、ローマ字の仕組みに倣って、Na-meと分解できる。その成功率が高いということが経験的に分かっている。この「ローマ字読みでよい」というモットーが便利に使われる。ここで多少問題なのは、字を読むと言う時に、字の方は書記体系であるから、分綴の問題であり、発音の方は音韻体系の中の音節である。これらは必ずしも一致しない。「ローマ字読みの可能性」をもう少し厳密に言うと、ドイツ語の綴りを目の前にした時、ローマ字のイメージを用い、子音が連続した時にはその間の適当な所で切る程度の予備知識を付け加えれば、容易に分

綴ることが出来る。その1分綴の音は、環境（前後がどのような綴りであるか）によって、発音はいくつかの可能性がある場合もあるが、ほぼ定まる。綴りの集まりである語は、その綴りの発音の連なりである、ということである。日本語の仮名はモーラの表示であると言われる。ドイツ語の分綴にも、仮に、モーラの性質があるのではないかとしておこう。

音節は、最大頭子音原理によって、子音から始まることを基本とする⁴⁾。その為、先に触れたように、分綴とは必ずしも一致しない。分綴は、もう一つの構成要素である形態素の境界とも妥協しなければならないからである。ということは勿論、音節と形態素の間にもズレが生じる。英語の teacher は teach-er と分綴する。音節からすれば、tea-cher となる筈である。これは明らかに形態素の境界に依っている。形態素は意味（機能）を担う最小単位であるから、基本的に形態素の境界は音節より大きな切れ目である。しかし、形態素が母音から始まる場合は、先行する形態素末の子音と一体になって音節を形成する。この場合、分綴は、音節を優先するか形態素の境界を優先するかによって、変わって来る。ドイツ語では音節を優先し、Leh-rer である。しかし、英語の場合、必ずしも形態素が優先するとは限らない。Japanese は形態上は Japan-ese であるが、実際の分綴は Jap-a-nese であり、これは音節をより強く映している。-ese も接尾辞ということは出来るが、アクセントを持ち、音韻上は語の中心である。そこで、最大頭子音原理によって、まず nese が定まり、第2アクセントのある Jap は短母音である為、p までを音節とし（モーラ的条件）、a が余る格好になる。

仮にドイツ語でこのような綴りに遭遇した場合（かつては実際に「日本人」という意味で使われた）、子音+母音を基本とすれば、正しい分綴、Ja-pa-ne-se が得られる。これを発音しようとする、それぞれの文字の代表音（即ちアルファベット名に使われている音）を以てすれば、ほぼ間違いない。選択の余地があるのは、子音では有声無声交替音である s であるが、音節頭にあり、母音が後続しているから、[z] である。アクセントが分からないが、おおよ後ろから2番目が多く、この場合それで正解である。この語は全て開音節から成っている。開音節の母音は閉音であり、アクセントのある音節では長音、ない音節では短音である。更に、短音の中に含まれるが、アクセント音節の直前、直後、あるいは語末の開音節の母音字が e であれば、通常は曖昧母音である。そのようにして、カタカナ発音「ヤパネーゼ」をその許容範囲に含む、より厳密な音の確定まで出来る。

英語において、Ja-pa-nese や Ja-pan-ese のように分節（綴）しても、実用的にはさほど困ることはない。それに対し、ドイツ語の場合、Lehr-er ではなく Leh-rer をとる、より積極的な理由がある。最大頭子音原理が強力に働き、音節は必ず子音から始まる。母音字から始まる音節には声門破裂音が先行する。ところが、母音から始まる接尾辞には声門破裂がない。母音字から始まる分綴は、基本的に声門破裂の存在を示唆してしまうのであ

ろう。逆に、声門破裂のない母音から始まる形態素は接尾辞である、と規定することも可能である。声門破裂のない英語の音節は、切断よりもむしろ連続性にその特徴があると思われる。

音節、分綴、形態素間のズレは、ドイツ語の場合、有声無声交替の選択に多少の困難をもたらす。有声子音は、「聞こえ」の関係から、母音に隣接することが基本である。ドイツ語では更に、音節末で有声であるのは鳴音 (l, m, n, r) に限られる。従って、有声の障害音を表す文字は、全て交替音になっている。üblich の場合は、音節と形態素境界が一致し、問題なく üb-lich と切れる。この時、b は音節末であるから、[p] である。しかし、übrig は [y:brɪç] であり、b は [b] になる。分綴は ü-brig であるが、これは妥協の産物である。この語の成り立ちは、über に形容詞語尾-ig が付いたものである。従って、形態素からは ü-br-ig と分節できる。しかし、-ig は、声門破裂がなく、上に述べた原理によって、前に子音を要求する。少なくとも -rig である必要はあるが、そこに境界がある強力な根拠がある訳ではない。むしろその前の b が有声であることが問題である。

音節が分綴通りであるとする、b は音節末に位置し、無声化する。そうならないことを考えると、むしろ -brig とした方がよい。音節頭ならば、Bruder のように、b は有声である。更にこれを支持する事実としては、初頭の ü は [y:] であることが挙げられる。声門破裂を伴った長閉母音であり、これのみで2モーラ分、即ち(2)で述べた完全音節である⁵⁾。ドイツ語では、これを音韻把握上の基本的単位と見なすことが出来る。この語の場合、b を末尾に付けると余剰になってしまう。分綴は、音節と形態素境界の間をとっていることになる。

この語の成り立ちからは、分綴点が b と r の間に落ちた他の理由もありそうである。この語の成り立ちには、曖昧母音の脱落が関わっている。本来ならば überig であるところ、曖昧母音は、有声子音に囲まれていると特に脱落し易い。b が有声に留まることで、却って曖昧母音の脱落を促進して音節を少なくしている。再構形を分綴すれば ü-be-rig となる。その e が脱落したものをそのまま分綴すれば、ü-b-rig になる。余剰となった b は前の音節に吸収されたのである。このことは、以下のような例を以て補足説明することが出来る。Tag の複数形は Tage である。Tage は形態上は Tag-e と分節できるが、音節上の分節は、Ta-ge である。アクセント位置は Ta にあることが容易に推定され、事実その通りである。すると a はアクセントのある開音節中にあるから、長音であり、語末の e は曖昧母音である。逆に単数形は、e の脱落したものである。従って、本来は Ta-g のように分節されていると見なせる。g は、語末にあるので無声化を起こすが、その他の環境は変わらない。Ta はそれだけで完全音節であり、-g は余剰であるが、子音単独では音節を形成できず、前の音節に吸収される。音節を形成しないものは分綴も出来ないのである。

問題を学習プログラムとして捉え直すと、いくつかの発音可能性を1つに絞り込んで行くプロセスを考えるこ

とになる。まず、母音は必ずいくつかの可能性がある。母音の種類は長閉母音、短閉母音、短開母音、曖昧母音のいずれかである。übrig の場合は、e を含んでいないから、曖昧母音はない。子音については、b, g には、無声化の、更に g には摩擦音化、r には母音化の可能性がある。これらを効率よく絞込み込む為には、まず -ig が接尾辞ではないかという推定が前提となると思われる。-ig は多音節語の末尾にある。2 音節語であれば、通常、語頭にアクセントを持つことになる。ということは、-ig は非アクセント性である。そこで接尾辞的であるという判断を下すことが出来る。母音の質、長短については確定できないが、接尾辞性を前提とすれば、閉音節である -ig の i は短開母音であり、g は硬口蓋摩擦音である可能性、即ち併せて [ɪç] である可能性が圧倒的に高くなる。同時にこれは、声門破裂を伴わないことを選択したのであるから、分綴、音節上は少なくとも -rig となる。この時、r は音節頭になり、音節末を前提とする母音化の可能性は消えたことになる。全くの白紙状態であれば、接尾辞は -rig か -ig かは判断できない。形態素を -rig だとすれば、先行する üb- の b は、音節末であるから [p] と見なされる。ü はアクセントを持つと判断したが、これが長閉母音か短閉母音かは確定できない。幸運にも、形態素を -ig であると推定できたとすると、übr-ig という分綴も得られ、br が分綴を超えて密着していることが分かる。前述のように、非声門破裂型の母音から始まる形態素は、前に必ず子音を要求し、この例では、音節は少なくとも -rig となるが、b も密着して切れないから -brig となる。交替音は音節頭で鳴音が続く時は有声である。初頭の ü は実質的にアクセントのある開音節であるから、長閉母音に定まる。綴り字を読む時は、分綴を暫定的な「見なし音節」とする他はないが、これまでに見たように、ある分綴が形態上の分綴と一致しない時、後続分綴が有声子音で始まっており、先行分綴末が交替音の場合は、その交替音は有声であり得ることが、重要な注意点となって来る。

3 母音

綴りから母音を確定する時も、上で若干触れたように、分綴、音節の把握が大きな役割を果たす。有声無声交替子音のいずれかへの確定と関連する点から見て行く。Bibliothek, Republik 双方の b は、[b] である。ということは、bl が一体で音節頭を成していることを意味する。旧正書法では、Bi-blio-thek, Re-pu-blik と分綴した。音節から見て、分綴固有の理由からズレを生じているのは、blio の所である。io は二重母音ではないので、より音節に即した分綴にすると、-bli-o- と分かれる。旧正書法は、母音字単独の分綴を避けたので、接着しているのである。書き直すと、Bi-bli-o-thek となる。末尾の部分を除いて、開音節が連続していることが見て取れる。開音節の母音は閉音である。ただし、a と ä は長音、短音共に、実質的に音質が変わらず、開音であるとされる。しかし、他の母音は長音ならば閉音であるので、整合性の為、この 2 音の場合は閉音＝開音と見なし、ド

イツ語の母音には、長閉音、短閉音、短開音、短曖昧母音があるとする。

さて、開音節であれば、母音は閉音であることが確定するのであるが、短音か長音かはアクセントを見なければ確定しない。いずれも最後の音節にアクセントがある。ということは、それより前の開音節の母音は皆、短音である。アクセント位置については後述する。アクセントを持つ最終音節は閉音節である。この場合、母音は長閉音か短閉音である。これまででは、いずれとも確定できない。ここで語彙の知識が必要となる。複数形を見ると、双方とも -en が付き、Bibliotheken, Republiken となる。これを改めて分綴すると、母音から始まる接尾辞が付いた為、Bi-blio-the-ken, Re-pu-bli-ken となる。即ち Tag, Tage で見たように、ある語彙にとっては、その活用形の中の最も長い形（名詞においては、複数 3 格形）が完全な形であって、単数形などはむしろ、語尾無しの短縮形と見なし得るのである。こうして見ると、これらの語のアクセント音節も、本来的には開音節であって、その母音は長音である。このことから、単音節語、ないしアクセントのある末尾の子音が 1 つだけの閉音節の母音は、長閉音の可能性が高いという経験則が出てくる。つまり、その子音は、母音で始まる語尾などによって、後続音節の頭を形成する可能性が高いということである。

bl などの子音連続が音節頭に出現するのは、外来語に限られる。分綴法では、外来語には bl, gr などとを一体のものとして扱うことがあるといった、曖昧なことしか分からない。例に挙げた 2 語は、それぞれギリシャ語、ラテン語に由来するものであるが、ドイツ語における分綴も、原語の規則を下敷きにしたものようである。ギリシャ語・ラテン語では、語頭に現れる子音連続は、語中にあっても、音節頭に連続するように分綴するのである⁶⁾。これらがドイツ語に入って、このような分綴、音節を意識して発音されると、母音は全て閉音になる。旧正書法ではこのように、母音の性質を始めとして、これらの語の音韻的特性がよく掴めたのであるが、新正書法では、üb-rig などと同じく、Bib-li-o-thek, Re-pub-lik と分綴することを標準とするようになった。むしろ ü-brig とする方が音韻的にはより分かりやすいぐらいであるのに、旧の分綴も認められているからいいようなものの、これでは、特性が掴みづらくなってしまい、賛成しかねる。尤も、ü-brig では語の成り立ちからますます遠ざかり、却って何だか分からなくなるという欠点はある。また、He-li-ko-pter (--kop-ter), In-ter-es-se (In-te-res-se), be-ob-ach-ten (be-o-bach-ten) のような分綴は、語源を探る上には重要であるが、音韻上は最早妥当性を持たない。() 内のように改変されて然るべきである。そして、分綴の意識が変われば、発音の方も変わって行くのであろう。

4 母音と二重子音字

分綴と音韻の間でズレを生じる事項の代表的なものが、二重子音字の使用である。二重子音字は、周知のように、

先行する母音が短開音であることを示す記号である。その詳細については、(2)で既に述べた⁷⁾。なぜ二重子音字があるかと言えば、開音節を閉音節に見せかける為である。音節は子音から始まることを原則とする。2母音間に1つの子音しかない時、その子音は従って、後続音節の頭となり、先行音節は開音節である。開音節に現れる母音は閉音が多いが、開音である場合がある。その時に、書記上、閉音節に見えるようにするのが二重子音字である。そこからまた、二重子音字の特質が導かれる。2母音間にある1子音を表しているのであるから、二重子音字は当然、2母音間にあることを基本とする。実際にはそれに当てはまらないことも多いが、その語彙の系列の中に条件を満たす形が含まれると考えられる。kommt は kommen の活用であるし、schnell のような形容詞ならば格語尾が付いて、schnelle のような形が存在する。kommen は kom-men と分綴され、見かけ上、アクセント閉音節の kom の母音は短開音で、men の母音は曖昧音である。しかし音節は ko-mm-en と切れるとするのが最も原則的である。開母音は閉音節に現れることを重要視すれば komm-en にも一理あり、形態の境界と一致するという利点もある。分綴通りの kom-men とする考え方もある。

この問題が最も鋭に現れるのが、交替音の二重子音字である。小学館独和大辞典初版の発音解説は、音節境界確定の困難な例として、Roggen を挙げている⁸⁾。Rogg-en のように捉えようと、交替音は無声化を起こすことになり、Ro-ggen だとすると、開母音が開音節に出現するので望ましくないとし、1つの音が両方の音節に関与する「接合音」の考え方を紹介している。筆者は(2)において、これは、開音節の開母音を認めれば解決するものとしたが、第2版では、一転して開音節内の開母音の存在を容認する立場を紹介している⁹⁾。

ここに関連するのが、(2)でも取り扱った Dogma である¹⁰⁾。分綴は Dog-ma であるが、g が有声である為、実質音節は Do-gma である。しかし、o は開音なので後ろに子音を要求する。従って g は接合音的であった。Roggen などとの違いは、開音節の開母音なのに、二重子音字と結合していないという1点である。そこから極めて単純な事実に思い至った。勿論これは、後ろが母音でない為である。形態上は Dogm-a と分綴されるので、音節とのズレを生じ、gm が一体で有声になっている。その時、一般的には前の音節が開音節になり、母音は閉音になるが、この語は閉音節性が勝っている。本来ならば、Doggma と表記したいところであるが、語源上、また、綴りの規則上、不可能なのである。長音が一義的に長音を表す表記になるとは限らないのと同様、短音も、必ずしも短音の表記をとるとは限らないのである。より簡単な例を挙げれば、Grammatik は、本当は Grammatik と書きたいのである。

交替音の時は、無声化の問題も生じたが、komm-en の場合も、重大な問題が残っている。前述のように、音節は子音から始まることを原則とする。従って、声門破裂のない-en は前の m を要求してしまう。しかし、二

重子音字は、その特性からして、音節末に来る可能性がある音素に限られ、音節末性を色濃く帯びている。典型的な例が ss である。s は交替音であるが、ss は無声音であることは、初級段階でも必須の学習項目である。交替音が音節頭に来て母音が後続すれば、有声である。二重子音字は、音節的な切り方をすれば、音節頭の単独音である。母音が後続することが原則であるから、有声で然るべきものとも考えられる。事実がこれに反しているのは、ss が音節末の性質を持つからではないか。実は、語頭では存在しないが、語中では [s] に母音が続くことがある。それを表記するのが、ß である。ss は s の二重子音字ではなく、ß に対応していると見れば一応の解答は得られる。(2)において発見したことであるが、短開音に有声の摩擦音が後続するのは極めて希なのである¹¹⁾。有声であれば、母音か(これも非常に希であるが)有声子音(鳴音)が後続することを意味し、同時にその摩擦音は音節頭音であることを示す。前は開音節になり、その母音は閉音になる。反対から言えば、有声の摩擦音は通常は二重子音字にならない。ss だけ特殊に見えるのは、有声の摩擦音は、前述のように、全て交替音である。有声の摩擦音は s の他に v と w があるが、vv や ww は、その条件に従って、やはり有声で、非常に特殊な例として用いられている。ところが、これらの文字には対応する無声子音字が存在する。f である。即ち二重子音字には専ら ff が使われる。s にはその対応がないのである。開音であると、続く摩擦音がほぼ無声音であるということは、やはり、前からの影響が強いと見なさざるを得ない。

それでは、同じく交替音である破裂音の場合は、Roggen のように、有声の二重子音字が広範に存在するのはなぜであろうか。破裂音はそれ自体2つの部分に大きく分かれる。即ち閉鎖と破裂である。有声音は声帯の振動が早い時期に始まる、むしろ調音の開始に先立つ位の時期に始まることで成立する。しかし破裂音はまず調音点で呼気が閉鎖される。呼気も停止しているから声帯も振動しない。まず無音状態があり、それからむしろ声帯が先行して振動し始めて破裂が起こる。g を例にとると、まず閉鎖性の k があり、声帯を振動させようとして、η のような状態になって破裂性の g になる。模式的に表記すれば、rokng-en のようになる。この閉鎖音のお陰で、破裂本体の有声性を失うことなく短音に続くことが出来るのではないかと考える。接合音は特殊なものではなく、どんな音であっても開始点と終了点があるのであるから、多かれ少なかれ、その音の前からその音の後へと連結する性質を持っている。また、開母音は、一定の枠の中へ次の音を取り込もうとしているという意味で、次子音と強い結合があるということは否定できないのである。

それ故、開音節の開母音は、無条件で存在する訳ではない。一部の外来語彙を除いて、単音節語として単独で存在する最小の音節は、長閉音の開音節、短開音と1つの末子音が結合した閉音節である。これらを(2)で完全音節と名付けた。それより末尾子音が多いものは過剰

音節であり、少ないものは不完全音節である。少ないとは、あらゆる短音の開音節である。また曖昧音の音節はいずれにせよ不完全である。短閉音は開音節にのみ出現するから、これも不完全である。これとはレベルが異なるが、多音節語の非アクセント音節は、音としては単独で存在し得るものも、独立していないと言える。他方、完全音節がなくとも、音節が集まることで、語として成り立つ。母音から始まる接尾辞は、1つの形態素ではあるが、音節ではない。語幹側の末尾子音と結び付いて初めて音節になる。

それでは、音節はどのように集合して語になるのだろうか。例えば、kommen は音節として ko-mmen のように切れるであろう。一応は、開母音開音節+曖昧母音閉音節であるから、不完全+不完全で完全音節はないが、開母音は後ろの子音と結合して見かけ上完全になる。即ち、kom である。m が前へ結合してしまうと、声門破裂がない曖昧母音の en が残り、音節でなくなってしまうように見えるが、前に述べたように、あらゆる音は、その調音点へ至る期間と調音点から次へ移行する期間を持っているから、中間音は、あえて接合音と言わなくとも、全て繋ぎの性質がある。kom の m は、声を出したまま、口を閉じて鼻へ息を抜く(鼻音)所までを必要とし、そのままの継続があった後、口を開き曖昧な e の構えになる所が me なのである。ついでに言うと、曖昧な、力の入らない e の構えから、声を出したまま舌尖を歯茎部に押し付け、息を鼻に回して、その状態を少し継続する所までが、en である。この部分的に両方へ繋がる様子を視覚的に見事に表しているのが二重子音字と言えるであろう。

このように不完全音節といえども、寄り集まることで語を形成するまでに至る。ここでモーラを考え併せて見たい。モーラはより韻律に接近した単位である。日本語は典型的なモーラの性質を備えており、子音+母音が一定の時間を示す。母音だけでも1単位を形成でき、長音は短音の2倍である。ドイツ語にはこれほどブロックを成す単位はなく、長音が短音の2単位ほどであることもないが、ローマ字読みの延長で考えると、音節として自立できる、長音の開音節、短音の閉音節、即ち、筆者が完全音節と名付けた単位は、丁度、2モーラと見なせる。ドイツ語の場合はこれが1単位であり、語の形成の際には端数が出る。再び kommen を例にとる。mm は強調発音でなければ、m を2単位発音している訳ではないので、m 1つで済みます。日本語式のコメンは ko-me-n (1モーラづつ) の3モーラである。ドイツ語では、一般的には ko-men (1+2) の3モーラである。あるいは kom-en (2+2) で4モーラとすることも考えられるが、後者は実感に合わず、CVCVC 構造を CVC+VC と見ることは不相当である可能性がある。ドイツ語ではどうしても音節性が勝り、声門破裂の有無が差を生む。CVC では2モーラであるが、VC では2モーラに足りない。日本語のブロック的な単位ではなく、もう少し伸縮性がある。簡単にして、語中の m を取り合っていると考え、仮に 0.5 モーラのようなものを設定すると、い

ずれにせよ kommen は3モーラになる。これは筆者の言う完全音節では1.5になる。これをなるべく整数値に近づけるような微調整が行われるのではないかというのが、筆者の仮説である。1つの音(素)の発音にも、開始期、中心期、終末期のようなものが考えられ、それらを1単位とすれば、より細かい音節やモーラの考察へ至ると思われる。今後の課題としたい。

いくつか簡単な例を挙げる。縦線は完全音節が成立する境界である。Talg (1音節, 3モーラ, 過剰1音節), Talge (2音節, 3モーラ, 不完全2音節), Taklt (1音節, 3モーラ, 過剰1音節), Kunst (1音節, 4モーラ, 過剰1音節), kommle (2音節, 2モーラ, 不完全2音節), kommlen (2音節, 3モーラ, 不完全2音節), Morlgen (2音節, 4モーラ, 不完全2音節), Phillosophiel (4音節, 5モーラ, 不完全4音節, 完全3音節相当)。

(2)において、Auto を例に引き、微調整について少し触れた¹²⁾。アクセントのない語末の開音節の母音が曖昧音でない時、半長母音化されると言われる。アクセントのない開音節であるから、本来は短閉音である。そうすると、不完全2音節となる。これを微調整して、完全2音節に近づけようとする働きが、半長母音化であると考える。半長母音化は、このような時にのみ特筆される現象であるが、微調整は、これのみにあるのではない。アクセントのある長音や二重母音の継続時間は、リズムによって調整されている。この場合は既に Au-の所で調整は始まっていると考えられる。-to の部分が不完全であるので、ここが目立つだけであろう。

三省堂クラウン独和辞典の発音解説では、語末の開音節について、Autobus のように語中に入った時は短音化し、Autos の時は長音化するとされることを紹介し、長音化の方は、実測による変化は見られないとしている。これはドイツ語の話し手の感覚に基づくものと推定している¹³⁾。Autobus にあえて第2アクセントを設ければ、-bus にある。この語の音節は1-3-2の順序に強い。言わば、強-弱-強の拍子があり、-to-は弱拍に当たる。それで短音性が目立つ。長音化は実質的に変わらないとすれば、端から語末音も長音としてしまった方が面倒がなくてよいように思われるが、問題は話者の感覚である。開音節の母音は閉音である。アクセントのない開音節では短閉音が本来である。語末の時、最終調整が行われて、多少長くなることもあっても、長音という感覚ではないであろう。一方、Autos の時は、変わらない長さであっても、閉音節である。ところが、あくまでも閉音である。閉音節の閉音は長音なのである。短音ならば、開音である筈だからである。

5 アクセント

発音を確定するにはアクセント位置を知らなければならない。綴りだけからアクセント位置を確定することはやはり難しい。語彙の知識が前提となることが多いからである。それでも、より普遍的な所でおおよその見当を付けることが出来る。元来、まず、ドイツ語は第1音節

にアクセントがあると言うことが常であった。確かにドイツ語は、接頭辞を除いて、原則的に第1音節に強いアクセントを持つに至ったことは歴史的事実であるが、外来語は増える一方であり、そのアクセント位置は多様である。具体的数値はつまびらかにしないが、アクセントを第1音節以外に持つ語彙は相当の数、比率に及ぶであろうことは、経験的にも感得される。伝統的な言い方は殆ど事実と反すると言える程である。外来語を区別することは容易ではなく、その区別を以てアクセントを確定しようとしても、循環論法に陥る。学習者にとって、外来語か否かは問題ではない。より包括的な記述が必要である。

包括的に見れば、経験的に、ペナルティマ、即ち、後ろから2番目にアクセントが来ることが多いと思われる。これは、ギリシャ語、ラテン語のアクセント位置である。外来の学術用語などは古典語の発音を受け継いだものであろう。基本的なドイツ語語彙は、それとは独立に、第1音節にアクセントが固定したのであるが、そのような語彙は、複合語を除いて、せいぜい2音節であり、余り本質的ではないが、同じ原則を以てすれば、多くが適合する。

最近では、勿論英語が急増している。それらの語の発音については、余り困難はないように思われる。それらが英語であることを認識すればよいからである。近代以降の語彙には、英語と並んで、フランス語が圧倒的に多い。フランス語のアクセント位置を受け継いだ為か、実際には最終音節(ウルティマ)にアクセントを持つ語も多い。このような状況からも分かるように、学習理念に立ち返って付言すれば、1つの言語の学習は、関連する言語の学習を必然的に含んでしまうのである。そこで求められるのは知識であって、論理学習をするのである。その言語を使えるようにするには、事実学習でトレーニングを積む他はない。英語の単語の発音に困難がないのは、その単語を知っているからである。ドイツ語として捉えると、様々な例外を作り、規則が複雑化してしまう。

色々なアクセント位置を統一的に扱えないであろうか。ドイツ語の韻律論では、基本的な詩脚として、ヤンプス(弱強)、トロヘーウス(強弱)、ダクテュルス(強弱弱)、アナペースト(弱強強)の4つを挙げることが多い。単語のアクセントも殆どこれに尽きる。こうすると、最後から3番目の音節(アンペナルティマ)にアクセントを持つ語(Amerika)までが含まれる。ここで、長大な語幹部分は、その最後にアクセントを持つのではないかと考える。ABCのようなアルファベット読みではCにアクセントを置く事実もこれを支持する。そして、強音節の後の弱音節は、接尾辞性を持つと言えるのではないか。2つ弱音節が続く場合があるが、言わば第1語尾、第2語尾といった区別があり、接尾辞の種類によっては、位置に制約があると考えている。詳細は今後明らかにしたいが、代表的なものとしては、第1語尾には、語彙の意味素性、派生などを担う語尾が、第2語尾には、それ自体が置き換わる、活用語尾のようなものが当てはまると思われる。lebenから派生したlebendigのアクセント移

動は有名であるが、このことから、-igは第1語尾であることが推定される。しかし、なぜこの語だけが例外として特筆されるのと言え、通常用いられる、-igを持つ(複合語でない)基礎語としては、ほぼ唯一この語だけが3音節なのである。Dóktor→Doktórenのアクセント移動はむしろ、-orが接尾辞である為には語末に位置しなければならないという制約に帰すると捉えられる。勿論ここで言う接尾辞性とは、アクセント音節の後の非アクセント音節の性質を包括的に言う用語であって、Arbeitのように、接尾辞と言う必要のない語も含まれ、Pianist, Praktikántのように、一般的には接尾辞と捉えられるものの、ここではアクセント上、接尾辞ではないものもある。

ドイツ語圏の地名には、思ったより多く、アクセントを第1音節に持たないものがあることに気付く¹⁴⁾。固有名は、それこそ個別に探る他はないようにも見えるが、居住地や地形を表す一般名詞に由来する、広範に用いられる地名形成用の基礎要素、-in, -hausen, -reuth, -werdaなどは、殆どの場合、それ自体にアクセントがある。中には、-dorfなどのようにかなり揺れを示すものもあるが、いずれにせよ、これらの要素の前に規定要素として固有部分がある。それらが意味上、形態上、複合語の規定(Bahn-hof)と感じられれば、規定部分にアクセントがあり、形容詞の規定と感じられれば、基礎部分にアクセントがあると考えられる。

6 rの母音化

以下の一覧は、既に(1)に記載したものであるが、ここに再掲する¹⁵⁾。これは理論的なものではなく、経験から試行錯誤した結果、割り出したものである。数値が大きいほど母音化度が高い。なお、ここで前後というのは、1音節内での位置についてである。

音節末側である	+ 2
音節末である	+ 1
多音節語の非アクセント音節末(側)である	+ 1
eの後である	+ 1
曖昧母音eの後である	+ 1
有アクセント音節より後の音節末(側)である	+ 1
(この項と前項に該当し、なおかつ+5以上の場合は、er全体をアと発音する。)	
長母音の後である	+ 1
音節頭(側)である	- 5
a音の後である	- 5
有声子音の前である	- 4
破裂音、破擦音の前である	- 3
摩擦音の前である	- 1
唇摩擦音[f]の前である	- 1
曖昧母音以外の短母音の後である	- 1
有アクセント音節末(側)である	- 1
有アクセント短母音の後である	- 3
単音節語末(側)である	- 1

複合語の要素となりアクセントを失った音節末 (側)
 である - 1
 複合語の要素となった単音節語末 (側) である - 1

r の母音化は、音節末にあることを条件とする。簡単に分かるのは語末にある時であるが、語中にある時に、その r が、音節のどこに位置しているかを見極めることが鍵である。

7 終わりに

言語をいかに使うか、という技術ばかりでなく、言語をいかに知るか、という技術も重要であることを強調して来た。更に重要なのは、その技術を用いて、何を伝えるかであることは勿論であるが、その技術をいかに使うべきか、という視点をないがしろにしては、その技術は空疎なものであろう。それは、人の心理や倫理への深い眼差しである。

参考文献

- 1) 宮永義夫 (2001) ドイツ語音韻把握の基礎 (2). 山梨医科大学紀要, 18: 135-142.
- 2) 宮永義夫 (2000) ドイツ語音韻把握の基礎 (1). 山

- 梨医科大学紀要, 17: 103.
- 3) 文献 1), 136.
- 4) 窪菌晴夫, 本間猛 (2002) 音節とモーラ. 研究社, 東京, 16.
- 5) 文献 1), 141.
- 6) 田中美知太郎, 松平千秋 (1978) ギリシア語入門. 岩波書店, 東京, 6.
- 7) 文献 1), 139.
- 8) 国松孝二 (編者代表) (1990) 独和大辞典コンパクト版, 初版. 小学館, 東京, 17.
- 9) 国松孝二 (編者代表) (2000) 独和大辞典コンパクト版, 第 2 版. 小学館, 東京, 19.
- 10) 文献 1), 141.
- 11) 文献 1), 139.
- 12) 文献 1), 141.
- 13) 濱川祥枝 (監修) (2002) クラウン独和辞典第 3 版. 三省堂, 東京, 15.
- 14) Berger D (1999) Duden, Geographische Namen in Deutschland. Dudenverlag, Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich.
- 15) 文献 2), 104.

Abstract

Grundlage für das Begreifen der deutschen Laut-Buchstabe-Beziehung (3)

MIYANAGA Yoshio

Diese Abhandlung ist der dritte Teil der Forschung, welche Regeln und wie weit sie die Lernenden kennen lernen müssen, um beliebigen Buchstabierungen als Deutsch richtig aussprechen zu können. Hier wird versucht, Prozesse zu zeigen, wie man an Hand der gegebenen Buchstabierungen durch das Ausfinden der Silbenstruktur und der Möglichkeit der Lage von Akzent, das im zweiten Teil behandelt wurde, zur richtigen Aussprache kommt.

Keywords: das Einzelne und das Allgemeine, Silben, Vokale, Doppelkonsonanten, Akzent